

ドイツブンデスリーガにおける ユース育成に関する研究

スポーツビジネス研究領域
5012A056-3 三澤 翼

研究指導教員：平田 竹男 教授

【序論】

近年ドイツサッカーにおける国際大会での活躍が非常に目立つようになってきている。ドイツサッカー連盟が主導となり、若手育成を進めてきた。その結果、U-19 ヨーロッパ選手権 2008 を皮切りに U-17 ヨーロッパ選手権 2009 そして U-21 ヨーロッパ選手権 2009 とヨーロッパの育成年代のタイトルを総なめにするに至った。ドイツブンデスリーガに所属するクラブは junioren と呼ばれるアカデミー育成組織を持ち、育成年代のカテゴリー分けは 2 歳刻みに A から G までに分かれており、ほとんどのクラブは 1 歳刻みにチームを構成している。

また、ドイツブンデスリーガでは 2006～2007 シーズンから外国人選手枠を撤廃したと同時に「ドイツ人選手枠」を設け、育成を行なっている。ドイツ人選手枠では最低 12 人のドイツ人選手と契約することを義務付けており、さらに、ブンデスリーガ 1 部では、「8 人はクラブの地元出身でなくてはならない」また、ブンデスリーガ 2 部では、「15～21 歳の間にドイツ国内で育成（最低 3 年）された 8 人の選手と契約し、そのうち 4 人は下部組織出身でなければならない」というルールを設けている。

このように育成に定評があるドイツのブンデスリーガにおけるユース育成を分析することは非常に大きな意義があると言える。

そこで本研究ではブンデスリーガ 1 部クラブのユースアカデミーを対象とし、ユースアカデミー出身選手が、そのトップチームもしくは、その他移籍先のクラブにおいてどのくらい活躍しているのかを明らかにすることを目的とする。

【手法】

本研究では、ドイツ・ブンデスリーガ公式サイトとドイツブンデスリーガが運営するデータサイト Weltfussball.de を参考にして出場試合数を調査した。得点数やアシスト数はポジションによって偏ってしまう可能性が考えられるので、本研究においては、選手の活躍状況を判断するための指標として出場試合数を用いた。

1) 研究対象

研究対象期間はデータの取得が可能であった

2003/2004 シーズンから 2012/2013 シーズンの全 10 シーズンとした。また、対象クラブは 2003/2004 シーズンにブンデスリーガ 1 部に所属していた全 18 クラブとした。

2) 研究の手続き

初めにドイツ・ブンデスリーガ公式サイトと Weltfussball.de から、対象シーズンにおける対象クラブ所属の全選手（約 6000 人分）の経歴を調査し、データベースをエクセルにて作成した。

さらに、対象全選手における各クラブ毎の出場試合数ランキングを作成した。

次に、(2012・兼清) の YDI 算出方法を参考に出場試合数がチーム 11 位以内の選手をレギュラークラス (①)、同じく 12 位から 18 位以内の選手をサブメンバークラス (②) として、それぞれのクラスに含まれるユース出身選手の人数を算出した。本研究では、ベンチ入り可能メンバーを含む 18 人の選手を各クラブにおける戦力要因と見なし、各クラブのユースアカデミーがそのクラブのトップチームやその他クラブに輩出したユース出身選手のうち、どれほどの選手が戦力要因に含まれるのかを調査した。

さらに、ドイツブンデスリーガクラブにおける①と②の合計値をユース育成指数「YDI (Youth Development Index)」(2012・兼清) と定義し、戦力要因となる選手に占めるユース出身選手数を算出したうえで、ユース出身選手がトップチームのレギュラークラスなのか、サブメンバークラスなのかを分析した。

【結果】

本研究では、ユース出身選手、YDI、ユース出身選手の内訳の 3 つを調査した。

1) ユース出身選手

ユース出身選手数の全クラブにおける平均値を見ると、2003/2004 シーズンは 2.78 人であったが、2005/2006 シーズンには 3.78 人まで増加した。その後、2006-2007 シーズンにかけては減少したものの、その後、ユース出身選手数は増加傾向を示し、2009/2010 シーズンには 9.94 人までに増加し、10 年間で 4.8 倍の増加が見ら

れた。

ユースアカデミー出身選手を最も多くトップチームやその他クラブに輩出させていたクラブを見ると、2003/2004 シーズンから2004/2005 シーズンにおいては FC Bayern München が最も多かった。2005/2006 シーズンにおいては FC Bayern München と Borussia Dortmund が12人で最多であり、2006/2007 シーズンにおいては Borussia Dortmund が最多となり、2007/2008 シーズンから2010/2011 シーズンでは FC Bayern München が最多であった。その後2011/2012 シーズンでは FC Schalke 04 が最多となり、2012/2013 シーズンでは FC Bayern München が最多という結果となった。

対象期間の10年間の平均ユース出身選手数を見ると、FC Bayern München が16.0と最も高く、次いで FC Schalke 04 が12.4、Bayer 04 Leverkusen が9.9という結果であった。直近の2012/2013 シーズンにおいては、FC Bayern München のユース出身選手数が22人と最も多く、次いで、FC Schalke 04 と Hansa Rostock の18人であった。また、ユース出身選手数が多いクラブの2003/2004 シーズンから2012/2013 シーズンの値を比較すると、FC Bayern München は13人から22人、FC Schalke 04 は4人から18人、Bayer 04 Leverkusen は12人から17人、Borussia Dortmund は4人から13人へと増加していることが分かった。

2) YDI

全クラブの平均では、2003/2004 シーズンから2012/2013 シーズンを比較すると、ブンデスリーガクラブの平均YDIは、1.33から5.5へと約4.14倍に増加していることが分かった。

各クラブにおけるYDIを見てみると、FC Bayern München の平均YDIが10.4と最も高く、次いで、FC Schalke 04 が5.6、VfB Stuttgart が4.6であることが分かった。

3) ユース出身選手の内訳

2003/2004 シーズンと2012/2013 シーズンを比較すると、レギュラークラスは1.67から3.75へ、サブメンバークラスは1.29から2.6へと、ともに約2倍に増加している結果となった。

また、その他の選手数の推移を見てみると、2003/2004 シーズンと2012/2013 シーズンにかけて、3.29から7.1へと約2.1倍に増加している結果となった。

【考察】

本研究により、2003/2004 シーズンから2012/2013 シーズンにかけて、Jクラブのユース出身選手数が増加していることが明らかになった。また、2003/2004 シーズンと2012/2013 シーズンにおけるYDI（レギュラークラスとサブメンバークラスの合計）を比較すると、ドイツブンデスリーガ1部クラブ全体で約4.14倍に増加していることが分かった。以上のことから、ドイツブンデスリーガ1部クラブ全体として、ユース出身選手の「数（量）」も、選手の「質」も高まっており、ユースアカデミー育成のレベルが向上していることが示唆された。これらを現在のドイツブンデスリーガにおけるユース育成の実績として評価することができる。

ただし、ユース出身選手数の内訳を分析したところ、その他のユース出身選手数が増加傾向にあることが示された。つまり、その他のユース出身選手数の増加は、戦力要因として活躍できているとは言えないユース出身選手数の増加を示唆することとなる。

対象シーズンにおいてユース出身選手の内訳を比較すると、YDI（レギュラークラスやサブメンバークラス）は1.3人から5.5にまで増加し、約4.14倍の増加であったのに対し、その他のユース出身選手は3.29人から7.05人で約2.14倍に増加していた。このことから、ドイツブンデスリーガクラブにおけるユース出身選手数は増加しているものの、戦力要因としての活躍ができないユース出身選手が相対的に多いことが考えられる。これは、ドイツブンデスリーガクラブにおけるユース育成の課題と見なすことができる。

【結論】

トップチームもしくはその他移籍先のクラブにおいて活躍するユースアカデミー出身選手の増加が見られ、ユース出身選手の「数（量）」も、選手の「質」も高くなり、育成のレベルが向上している。

その中で戦力要因としての活躍ができないユース出身選手も数多く生み出している点は、ドイツブンデスリーガクラブにおけるユース育成の課題であると言える。